

村に生きる日日

古谷綱武編

農村新書

I

新評論社

村に生きる日日

古谷綱武編

新評論社

農村新書

1

村に生きる日日

昭和29年12月15日 発行

¥ 170.

編 者 古 谷 綱 武

発行者 美 作 太 郎

印刷者 西 村 徳 次

発行所 東京都文京区 水道端1-38 株式 新 評 論 社

電話 小石川 (92) 0136番

振替 東 京 113487番

落丁本、亂丁本はお取替えいたします。

はしがき

本書の内容は、名もない信州の農村の人々が、自らの眼で自らの生活をリアルに描いた記録で、感傷的な文学趣味や公式的なイデオロギーで書かれたものではない。ある意味では「山びこ学校」の大人版ともいえよう。しかも、戦後の「大人の綴方運動」の流行に触発されて急に成ったものではなく、その芽が戦前から培われてきたものであるところに、この「生活雑記」の特色がある。

信州の農村青年たちの間に生活綴方の運動が起ったのは、農村恐慌のあれくるった昭和五年のことである。この運動は信濃毎日新聞の主筆桐生悠々と学芸部の記者たちによつて育成され、地道な農村文化運動の一つとなつて、次第に全県にひろまつていった。——昭和十五年これらの作品は作家の川端康成、片岡鉄兵の監修により『農村青年報告』と題して第三集まで出版し、全国的に注目されたが、軍部の圧迫で止むなく中絶したという歴史をもっている。いわば「大人の生活綴方運動」の先駆だったわけである。当時の熱心な投稿者だった青年たちは、現在いづれも村の中堅として活躍している事実をみれば、この生活綴方の運動が、信州の農村青年のものの見方をどのように培ったがわかるであらう。

自分たちの生活をリアルに表現するということは、農村の人々にとっては幾つかの困難な條件を伴う。この困難に抗して生活綴方を書くことは大変な勇気と努力のいることである。しかるに戦後、信濃毎日新聞紙上に「生活雑記」欄を復活したところ、農山村から続々と作品が寄せられ、ことに主婦の投稿が激増している。——このことは、信州の農民の間に生活綴方への認識の基盤があつたことを立証するものといえよう。

戦後の「生活雑記」が巾広い信州の庶民から親まれているのは、自分たちと同じ生活をしている人々が、自分たちと同じ生活の中から矛盾や苦しみやよろこびを、リアルに描いていることに對する同感にほかならない。

紙数の関係で九十二篇しか収録できなかったことと、農村関係以外の職場や町の生活に取材した同様のすぐれた作品を割愛せねばならなかったことを残念に思っている。

この生活雑記出版に関する事務上の仕事は信毎調査出版部長長谷川洋吉が当り、作品の編集は信毎文化部記者東栄蔵、西條具吉の二人が当つたことを付記しておく。

信濃毎日新聞編集局にて

石原俊輝

も

く

じ

はしがき・・・・・・・・・・・・・・・・石原俊輝

I

卵の物語・・・・・・・・・・・・・・・・一五

ヒヨウ・・・・・・・・・・・・・・・・一七

麻の村・・・・・・・・・・・・・・・・二〇

緬羊・・・・・・・・・・・・・・・・二三

裸になる山・・・・・・・・・・・・・・・・二五

炭を焼きつつ・・・・・・・・・・・・・・・・二七

桑不足・・・・・・・・・・・・・・・・二九

豚・・・・・・・・・・・・・・・・三一

漬菜・・・・・・・・・・・・・・・・三三

一等米・・・・・・・・・・・・・・・・三六

にわとり……………	三九
ささやかな幸福……………	四二
炭焼きの洗足湯……………	四四
水飲み百姓の悩み……………	四七
かいこまち……………	五〇
「ホリドール」の争い……………	五三
イモチと白はがれ……………	五六
稻熱病の消毒……………	五八
救農工事に働く主婦……………	六一
乳牛……………	六五
畦はたき……………	六八
農休みに想う……………	七一

Ⅱ

大家族	七七
簡素化結婚	七九
肥取り	八一
ぼたもち	八三
父の酒乱	八六
栄養食の工夫	八九
鶏卵と小遣い	九一
泥棒の入れない村	九四
べんとうのおさい	九七
美代の願い	九九
掛軸	一〇二
藁ぶきの屋根の下で	一〇五
お酒	一〇八
幸うすき農民	一一一

八年の安静	一四
軍艦マーチ	一七
退所	一九
哀しい風物詩「菓売り」	二三
進学	二六
兄の恋	三〇
講演会に行つた妻	三三
迷信	三六
世間態に負けた兄	三八
姉さんへの手紙	四一

Ⅲ

方角	四九
嫁	五一

農休み	一五三
母のよろこび	一五六
上京した恵子	一五八
古い浴衣	一六二
日記に想う	一六四
十年たてば	一六八
着物	一七〇
立ち話	一七三
さと子の日記	一七五
凶作と洋裁	一七八
結婚	一八一
二度目の破談	一八四
冬に学ぶ	一八七
姉の結婚	一八九

嫁の病氣	一九三
母と娘と	一九五
結婚になやむ兄	一九八

Ⅲ

一等賞	二〇五
うさぎ	二〇七
底流	二〇九
せぎ権	二一三
鍬騷動	二一五
境争い	二一九
道路	二二一
県道	二二四
生活改善実行委員長	二二六

選 挙……………二二九

貧乏部落の水道……………二二二

貰い風呂……………二二五

農村という名の世界……………二二八

婦人会長の辞表……………二四〇

三太の疑問……………二四三

村の民生委員……………二四六

つむじ風……………二五〇

婦人団体のならわし……………二五三

部 落 費……………二五六

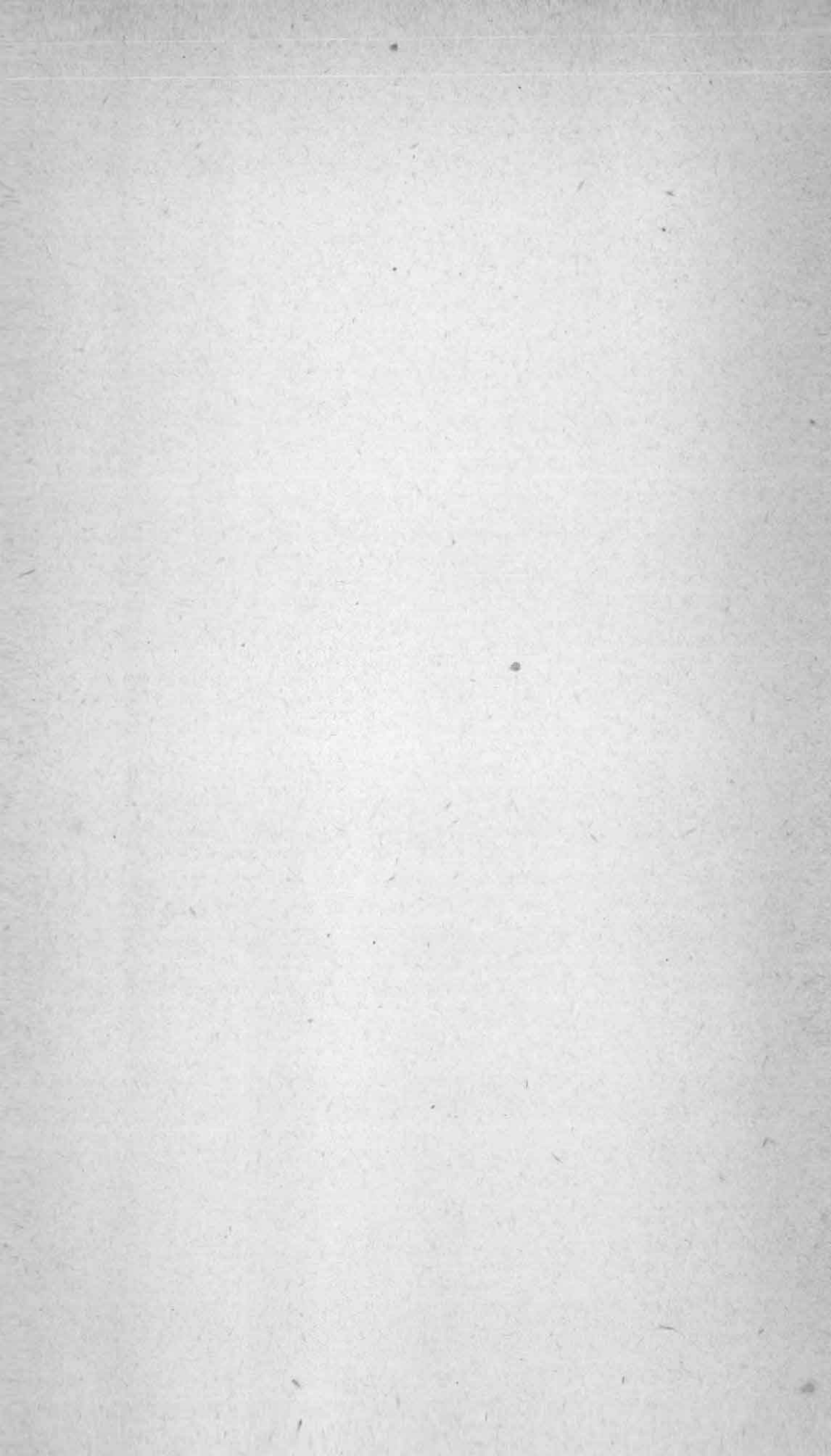
村の洋裁講座……………二六〇

農山村の青年たち……………二六三

河川復旧工事に思う……………二六六

水道と文化生活……………二六八

青年団と家庭生活	二七二
お寺の負担金	二七五
凶作と宮造り	二七九
副会長になる	二八一
あとがき	古谷綱武



I

